

## 高齢社会対策の基本的在り方等に関する検討会（第3回）

2012年1月12日 横浜国立大学 関 ふ佐子

## — 高齢社会対策の基本的在り方等に関する検討会報告書(素案) への意見 —

## I 主要な点

## 1. 見出しにサブタイトルを設置

- ・ 高齢社会対策としても意識改革が重要である。4の「今後の超高齢社会に向けた基本的な考え方」を提言する際は、分かりやすく伝わりやすいキャッチフレーズを、各見出しのサブタイトルとして提示してはどうか。

## (1) 高齢者の捉え方の意識改革

- 候補① 65歳は高齢者か
- 候補② 高齢者は何歳からか
- 候補③ 長寿社会における高齢者の年齢
- ・ 候補①がよいと思われるが、表現を柔らかくするならば②、次に③も考えられる。

## (2) 高齢者が意欲と能力に応じて活躍できる環境づくり

- エイジフリーに活躍できる舞台づくり

## (3) 高齢者の「安心な暮らし」を実現する環境の整備

- 楽隠居社会と地域互助の醸成
- ・ 「地域」と「互助」というキーワードを、どこかに盛り込みたく、ここに入れた。

## (4) 若年期からの高齢期への備え

- 若年期からの高齢期への人生・社会設計
- 今日から始まる人生後半戦への備え（サブタイトル）
- ・ 見出しとサブタイトルにおいて「備え」という言葉が重ならず、見出しをより明確化するために、見出しも変更してはどうか。

## 2. 高齢者の捉え方の意識改革 [4 (1)]

## (1) 年齢による区分と特徴による区分の明確化

- ・ 本報告書では、次の2点を提言するところ、両者の違いを明確に記載し、とりわけ前回の大綱にない新しい視点である①を打ち出すべきである。

- ① 客観的な年齢で特定の世代を表現する「高齢者」という言葉の使い方において、高齢者を65歳以上と捉えるのは、長寿社会の実態にあわない点。
- ② 高齢者は多様であり、特定の高齢者像にとらわれるべきではない点。  
これは、高齢者を、その特徴で区分する視点である。

## (2) 高齢者を特徴で捉えた場合の呼び方

- ・ (1) の②にある高齢者像の多様性についての認識を定着させ、それと年齢による呼び方である「高齢者」という言葉を使い分けるために、65歳以上の者の特徴に応じた呼び方を提案してはどうか。
- ・ 具体的には、a)働く意欲と能力のある世代と、b)引退し保障の必要となる世代をわけてはどうか。これは年齢による区分ではないが、これらの世代をイメージするおおよその年齢としては、a)は65歳～74歳、b)は75歳以上をイメージしている。
- ・ 試みの通称
  - ① 現役シニア / 生き生きシニア
  - ② 悠然シニア / 円熟シニア
- ・ 生き活きと活動する現役であるシニアと、ゆったりと落ち着いた老後を悠然と過ごす円熟したシニアを分けた。
- ・ a と b は対応すべきであり、a)を「現役シニア」と呼ぶ場合は、b)は「悠然シニア」が相応しい。「生き活きシニア」には、「悠然シニア」も「円熟シニア」もあう。
- ・ 具体的には、上記(1)と(2)を反映して、p12(1)「高齢者の捉え方の意識改革」の部分を例えば下記のように書き変えてはどうか(太字が変更点)。
- ・ これまでみてきたように、「高齢者」といっても多様で、**65歳以上の者を**年齢で一律に区切るという捉え方には無理が生じていると考えられる。また、団塊の世代が平成24年から65歳に到達することから、これまで作られてきた「高齢者」像に一層の変化が見込まれる。
- ・ **65歳以上の者を**一律に捉え、支えが必要であるとする考え方や社会の在り様は、これまでみてきた意欲と能力のある高齢者の実態から乖離している。**意欲と能力の活用の阻害要因ともなっている。他方で、元気な者も含めた65歳以上の者を**一律に支える余力は、若中年者にはなくなってきた。そこで第1に、**高齢者のやる気や能力を最大限活かすためにも、高齢者像の固定観念を変えていくことが必要である。**
- ・ そのためには、**65歳以上の者の捉え方**に対する国民の意識変革が不可欠であり、それに向けた啓発が必要である。その際には、楽しく豊かで円熟した人生を送っているという多様なロールモデルについて情報提供を行っていくことも重要である。
- ・ これにあたっては、**特徴に応じた65歳以上の者の呼称が役に立つ。65歳以上の者を、意欲と能力のある世代と、引退し支えが必要な世代とに分け、その特徴に応じて呼ぶことなどが考えられる。その呼称は募集などするとよいが、例えば生き生きと活動する現役であるシニアと、ゆったりと落ち着いた老後を悠然と過ごす円熟したシニアを分け、前者を「現役シニア」や「生き活きシニア」などと呼び、後者を「悠然シニア」、や「円熟シニア」などと呼んではどうか。**
- ・ 第2に、客観的な年齢で特定の世代を区分し、**65歳以上の者を指す「高齢者」という言葉の使い方を、そもそも見直してはどうか。**3の(1)の②で検証したとおり、65歳以上を「高齢者」と区分したのは1950年代である。その後、我が国の平均寿命は格段に伸びており、呼び名と対象者の実像があわなくなってきた。高齢者は支えが

必要な人と捉えられがちなかで、高齢社会の負担感ばかりが増幅している。長寿社会において、年長者としてサポートしたいと違和感なく捉えられる年齢は何歳かを検討し、高齢者という言葉の対象を、例えば75歳以上の者などに変更する時期にきているのではないか。なお、この点は、平均寿命の伸長により変えていく必要がある。

- ・ 一方で、社会保障制度をはじめとする既存の各制度における施策の趣旨及び現在の取扱いを踏まえ、国民生活や将来設計の安心の確保ということを考慮して、社会システムへの影響などについて多角的な観点から検討する必要もある。中長期的課題として引き続き国民的議論を深め、合意形成をしていく必要がある。その際には、実態に基づく制度設計が求められる。」

### (3) 「高齢者」という言葉の使い方

- ・ 65歳以上の者を指している点を明記し、「高齢者」という言葉の使い方を明確にする。
- ・ 例えば、p3の(所得・資産格差の拡大)の冒頭にある「高齢者」という言葉は、65歳以上の者を指すと思われるが、その段落には、60歳以上の者についての記述もある。
- ・ 例えばp2の冒頭の記述を次のようにしてはどうか。  
「……総人口に占める高齢者(以下、断わりのない限り、65歳以上の者を指す。)の割合は……」

## 3. 「互助」の捉え方

- ・ 本報告書が「互助」の視点を打ち出し、私的な支援の要として「互助」を推進するとしても、これは、公序や共助の範囲を狭めることを前提としてはいない点を明確にすべきである。というのも、例えば「互助」について提唱した「地域包括ケア研究会 報告書」(2009年)は、この点を批判されている<sup>1</sup>。
- ・ さらに、公的機関が行うのは、公助と共助に加えて、自助や互助が行われやすくなるような環境整備であり、こうした、自助や互助の潤滑油としての機能も、社会保障の役割として着目する点に意義がある。
- ・ そこで具体的には、p15(3)②(「互助」によるコミュニティの再生)の最後に次のような文章を挿入してはどうか。  
「なお、「互助」の再構築を推進するといっても、これは、公助や共助の後退を意味するものではない。地域に根差した助け合いを推進するにあたっては、「自助・互助・共助・公助」のすべてが必要となる。このうち公的機関が行うのは、公助と共助に加えて、自助や互助が行われやすくなるような環境整備である。公的機関などによる直接的な支援や強制加入の相互扶助制度に加えて、自助や互助のバックアップにも公的資金を投入するという点に意義がある。自助や互助の潤滑油としての機能も、社会保障の役割として着目するわけである。」

---

<sup>1</sup> 地域包括ケア研究会報告書の定義について、社会保障のなし崩し的な変更などを危惧するものとして、佐藤卓利「介護保険と地域包括ケアシステム」賃金と社会保障 1535号(2011年)26頁以下、里見賢治「介護保険の10年と2011年改訂の動向」賃金と社会保障 1535号(2011年)4頁以下。

#### 4. 「高齢者の「安心な暮らし」を実現する」ことの意味

##### p15 ①老後の安心を確保するための社会保障制度

- ・ 老後の安心を確保する社会保障制度を構築するという点のみを記載すると、これを支える負担を担える力は現在の若中年者にはないという批判を呼びかねない<sup>2</sup>。本報告は、意欲と能力のある高齢者は、支えられる側ではなく、可能であれば支える側にたつという認識にたつ。そこで、老後の安心といっても、その老後は、(1)の「高齢者の捉え方」での認識を前提とした、支えの必要な人の老後である点も明記するとよい。
- ・ 具体的には、p15の冒頭の文章の最後に、例えば次のような一文を加えてはどうか。  
「なお、老後の安心を確保するために社会保障制度を充実するといっても、この老後は65歳以上の者の生活を意味するわけではない。本報告は、(1)にあるとおり高齢者の捉え方を変えていくという認識を前提とする。意欲と能力のある65歳以上の者は、支えられる側ではなく、可能であれば支える側にもまわる一方、支援が必要になった場合は、安心な暮らしを保障するわけである。」

## II 細かな点

### はじめに P1、下から2段落

- ・ 震災について、「事態を冷静に受け止め」は必ずしもそうではなく削除。
- ・ 「日本人の自律のある生き方が再評価」— 日本人は、そもそも「自律のある生き方」をしていたか見解が分かれる。日本人の生き方は評価されたが、「自律のある」生き方が「再評価」されたわけではないのではないか。

### 1. 高齢社会の現状

#### (1) 高齢化の現状

##### P4 (高齢期に向けた準備のための時間が少ない)

- ・ 見出しのメッセージを本文では伝えていないため、最後に、次のような文章を加えてはどうか。  
「そのため、第2の人生に向けた自己啓発など、高齢期への準備をする時間も少ない。」

### 3. 超高齢社会における課題

#### (1) 高齢者の在り方の変化

##### P8 ②「高齢者」の実態とこれまでの意識の乖離、2段落

- ・ 「自己実現の欲求まで満たさないと生きている価値がない」という点は、例えば次のように、表現を少し柔らかくしてはどうか。また、もともと自己実現の欲求を持つ高齢者もいたので、「出てきている」という表現も修正(冒頭の文章も校正)。  
「また、健康維持や生きがいのため、社会とのつながりを持ちたい……そうした高齢者の中には、自己実現の欲求を満たしたいと思う者も存在する。」

---

<sup>2</sup> こうした批判を回避すべく、「高齢者」の捉え方を変えたうえで、高齢者の功績を評価し、人生の晩年期には「お疲れ様」と社会保障を充実する社会像について詳しく論証したものとして、資料3、拙稿「「高齢」保障と高齢者の功績」小宮文人=島田陽一=加藤智章=菊池馨実編『社会法の再構築』(旬報社、2011年)195-213頁参照。

- ・ 高齢者を 65 歳以上の者と捉えるべきでない理由には、高齢者自身の捉え方に加えて、60 年前より格段に人数の増えた高齢者を若中年者が支えきれないという側面もある。そこで、この点についても例えば下記のように書き加えてはどうか。

「さらに、高齢者の人数が 60 年前より格段に増えたなか、若中年者の負担感は増大しており、若中年者は、元気で働く意欲のある者も含めた 65 歳以上の者すべてを支えきれなくなってきている。」

### (3) 世代間格差・世代内格差に対する不安感の増加

- ・ P9 1 番下の記述は、それまでに指摘されてきた所得の格差の話と地域における連帯・つながり作りの仕掛けの関係が分かりにくい。そこで例えば、次のようにしてはどうか。

「……世代内でのバランスの確保を行うために、経済的な再配分のみならず、地域の支え合いを通じた生活支援（電球替えといった日頃の生活におけるちょっとした支援）が可能となる、地域における連帯やつながりを作る仕掛けづくりが課題になる。」

### (4) 地域のとつながりの希薄化、高齢者の社会的孤立化

- ・ P10 (4) 1 段落などに「孤独死」という言葉がある。内閣府『高齢社会白書』（2011 年）68 頁は「孤立死」という言葉を採用しているが、本報告でも「孤独死」ではなく、「孤立死」としてはどうか。また、孤独死には様々な定義があるなか<sup>3</sup>、本報告では、孤独死の何が問題と考えているのか、より明確化してはどうか。
- ・ P10 (4) 5 段落にあるとおり、買い物難民を孤立化が進行した一例としてよいか。
- ・ 孤立化が進行した地域に買い物難民が多いのは確かだが、買い物難民は、孤立化したから発生するというよりも、人口減少などにより店舗が撤退した結果生まれるものである。
- ・ 買い物難民の例は、地域でのつながり強化の話につながっているが、買い物難民への対策としては、つながりよりも、バスのチャーターなどが有効との考えもある。
- ・ P10 (4) 6 段落にあるとおり、かつての地縁といったつながりを「復活させる」というよりは、今の社会に適合した新たなつながりをどう作っていくかが課題なのではないか。というのも、かつての地縁・地縁的つながりを忌避して孤立化していった人も存在し、これらの人たちのプライバシーを尊重すべきだからである。
- ・ 新たなつながりの具体像は、p15「アウトリーチ型の支援を通じたコミュニティの強化」に記述し、ここでの記述は下記のようにしてはどうか。

「このような状況に鑑みると、高齢者の現状やニーズを踏まえつつ、今後の社会に適

---

<sup>3</sup> 孤独死の定義について、小辻寿規＝小林宗之「孤独死報道の歴史」コア・エシックス 7 号（2011 年）122 頁<<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/ce/2011/kh01b.pdf>>参照。

合した地域社会における人々の新たなつながりをどのように作り出していくのが、今後の課題としてあげられる。」

#### 4. 今後の超高齢社会に向けた基本的な考え方

##### (2) 高齢者が意欲と能力に応じて活躍できる環境づくり

###### a) P13 (柔軟な働き方の実現)

- ・ 65歳までの雇用継続が論議されている現在、難しいかもしれないが、70歳や75歳まで働けるエイジフリー社会を目指す点を柔らかく書いてはどうか。
- ・ 例えば、すでに行われている施策を記述する形で、1段落めの最後に次のような文章を加えてはどうか。  
「さらには、70歳や75歳までも働けるエイジフリーな社会を、それを行う企業を表彰するといった形で、サポート（側面支援）していく。」

###### b) P14 冒頭 (様々な生き方を可能とする新しい活躍の場の創出)

- ・ 男性のみならず女性も活躍の場を必要とする。高齢男性とは異なる側面ももつ高齢女性の活躍できる場についても、別途検討していくべきであろう。そこで、例えば次のような記述を加えてはどうか。  
「さらに、主婦やパートを業としてきた高齢女性が蓄積してきた、生活者としての経験を活かし、地域における就業や社会参加に結びつけることも重要である。」
- ・ 経済的な評価に加えて時間を評価する点を明確に記載し、名誉の尊重と分け、例えば次のような形で記述してはどうか。  
「なお、多様な評価基準を推奨し、有償ボランティアなどの経済的な評価のみならず、時間を評価する「時間貯蓄」や金銭とは異なる評価基準である「ポイント制度」、さらには高齢者の功績を名誉という形で尊重する仕組みも検討されるべきである。」

###### c) P14 (意欲と活躍できる場のつながりの強化)

- ・ 団塊の世代には、コンピュータを使える人も増えている。仕事やボランティア活動を探すツールとして、ホームページによる検索サイトの充実も書き加えてはどうか。
- ・ 意欲が就労やボランティア活動につながらない理由の一つに、これまで持っていた能力と求められる能力がミスマッチな場合もある。意欲に応じた能力の欠如を補う、高齢者のための施策についても、例えば次のように記載してはどうか。  
「なお、これまでの長時間労働など様々な理由により高齢期に向けた十分な備えができておらず、意欲に応じた能力に欠ける高齢者についても、生涯学習や健康維持に向けた取組を積極的に進めていく必要がある。」

### (3) 高齢者の「安心な暮らし」を実現する環境の整備

#### ② 地域における「互助」の再生・コミュニティの強化

##### a) 「互助」によるコミュニティの再生

- ・ P10 のつながりの復活の議論と同様、コミュニティを再生するというよりも、新たに構築していくという側面を強調してはどうか。
- ・ そこで見出しは、「「互助」によるコミュニティの再構築」としてはどうか。

##### b) (アウトリーチ型の支援を通じたコミュニティの強化)

- ・ アウトリーチ型の支援は重要だが、P10 で記載したとおり、高齢者のプライバシーも尊重する必要がある。高齢者の見守り活動をしている側からすると、命にも関わるため、プライベートを尊重すべきではない側面があるとの意見もある。とはいえ、個々の自宅への立ち入りなどには配慮が必要である。
- ・ この点からすると、p16 の 4 段落めの記述において、「高齢者の日常生活全般に地域の目が行き届いている」という表現は、下記のとおり修正してはどうか。
- ・ 「……総合的なネットワークが構築され、高齢者の日常生活に過不足なく地域の目が行き届いている地域を実現していくことが望まれる。」
- ・ さらに、お互いの家を行き来するような地縁とは異なる、日常生活にさりげなく届く、新たなつながりも作っていかねばならない。
- ・ そこで p16 の 4 段落めの記述の後に (③の前)、次のような記述を入れてはどうか。  
「なお、アウトリーチする際には、プライバシーを尊重されたいと思う高齢者の存在などにも配慮した仕組みづくりも必要である。例えば、集会所や食堂でのネットワークづくりなど、地域での緩いネットワーク、さりげない見守りの構築も考えられる<sup>4</sup>。」
- ・ アウトリーチにあたっては、それを行う、支援する側に対するサポートも必要となる。しっかりとした支援体制が築ければ、孤立化も減ってゆくが、人材の確保や育成などに苦勞している団体も多い。そこで、この項目の最後に、次の文章を入れてはどうか。  
「また、支援団体等の活動により孤立や孤立死が減少した例があることからすると、支援団体に対するサポートも重要である。」

#### ③ 高齢者が快適で安心して生活できる環境整備

##### P17 (高齢者が安全に暮らせる制度整備)

- ・ 成年後見制度の必要性と需要の増加に伴う担い手を拡充するためには、法人後見についても触れてはどうか。そのため、2 段落を、次のように修正してはどうか。  
「……「市民後見人」を中心とした支援体制や「法人後見」をはじめとした組織的な

---

<sup>4</sup> 地域での(緩い)ネットワークでの支援、(さりげない)見守りのニーズについて、小池高史＝西森利樹＝堀恭子＝朝比奈千絵＝長谷川倫子＝宮前史子＝張弁林＝許海栄＝佐野美媛＝安藤孝敏「民間団体による独居高齢者への支援活動の現状と課題 ―支援団体へのインタビューから―」技術マネジメント研究 8 号 (2011 年) 27-35 頁  
<<http://kamome.lib.ynu.ac.jp/dspace/kiyo/yjtms>>参照。

後見体制を構築していく必要がある。」

- ここでは、1段落、3段落、4段落で、「被害者」としての高齢者について語られている。他方、孤立化した高齢者は、万引きを行うなど「加害者」となる場合もあり、加害者としての高齢者像にも着目すべきではないか。そこで、1段落と4段落の記述については、「被害者・加害者」と併記してはどうか。

#### (4) 若年期からの高齢期への備え

##### P18 (人的資本のストックの蓄積と活用の促進)

- 女性高齢者は、終身雇用されてきた男性とは異なる人生を歩んできた結果、様々な備えに欠く場合も多い。低年金につながるM字型カーブの解消などを進めるとともに、主婦やパートを業とした女性にあった高齢期へ備えられる環境の整備も必要となる。そこで、例えば下記のような文章を、2ポツ目(2段落)として加えてはどうか。  
「なお、女性高齢者のなかには、高齢期に達する以前の若い時期において、子育て等で就業を中断したため、高齢期に到るまでの間に就業経験を積み、職業能力を蓄積していくことが困難だった者もいる。子育てにより仕事を中断しなくてもよい環境整備に加えて、終身雇用されている男性とは異なる、主婦やパートを業とした女性にあった自己啓発・スキルアップのできる環境も整備しなければならない。」
- 現在の2段落は、1段落と重複する部分がある。学校、職場、地域社会において、高齢期の生活のイメージづくりを意識した能力開発・社会参加・生涯学習などに取り組むべき点を強調する下記の文章に変えてはどうか。  
「……イメージしておくことが重要であり、学校、職場、地域においては、高齢期における就労、社会参加、学習などの生活の考慮につながる、能力開発、社会参加、生涯学習などに取り組むことが必要である。」